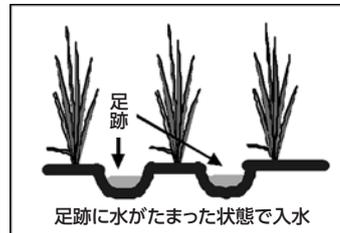


<水稻の栽培ポイント>

1 水管理

(1) 間断かん水の実施

- 田植後1か月程度で必要茎数（1株当たり20本程度）が確保できたら間断かん水を行いましょ。
- 麦わらをすき込んだほ場については、わらが分解される際ガスが発生して、水稻の初期生育に影響を与えることがあるため、移植20～25日後から早めの間断かん水を行い、ガス抜きをしましょ。



2 加里の追肥

(1) 施用時期

- 出穂45～40日前（普通植とちぎの星：7月上～中旬、普通植あさひの夢：7月中旬）に加里を追肥すると、稲体を健全に保ち、根の活力を維持できます。
特に、けい酸加里を施用すると茎葉部を硬くし倒伏に対して強くなります。また、いもち病にかかりにくくなる効果もあります。

(2) 施用量

- 加里成分で10a当たり4～5kgを施用します。

肥料の例	加里成分量	10a当たり施肥量(現物)
塩化加里(粒)	60%	7～8kg
けい酸加里34	20%	20～25kg

3 穂肥の施用

○ 品種ごとの標準的な穂肥の時期と量は下表のとおりです。

○ 葉色が濃すぎる場合は穂肥の量を減らすか、施用時期を遅らせます。

※一発基肥（BBあさひの夢専用、とちぎの星専用など）を使用した場合は**原則穂肥の必要はありません。**

品種名	穂肥の時期	10a当たり施肥量(肥料の例)
コシヒカリ	出穂の15日前(幼穂長20mm)	窒素成分2～3kg(NK-505号、NK-205号 10～15kg)
とちぎの星	出穂の15日前(幼穂長20mm)	窒素成分2～3kg(NK-505号、NK-205号 10～15kg)
あさひの夢	出穂の18～20日前(幼穂長5mm)	窒素成分2～3kg(NK-505号、NK-205号 10～15kg) ※NK-505号は 出穂20日前と生育に応じて1回目の追肥から10日～穂揃い期までの2回に分けて施用する。

4 病害虫対策

いもち病

いもち病は、収量・品質に多大な被害をもたらす病気です。曇天・少日照・やや低い気温（25℃くらい）・高湿度などの条件で感染し易くなります。

感染に好適な気象条件が現れたら、ほ場の見回りをこまめに実施し、早い段階で発生状況（病斑）に応じて防除を行いましょ。

【防除農薬の例】

令和6年6月6日時点の登録

農薬名	希釈、散布量	使用時期	使用方法	使用回数	RACコード
ブラシフロアブル	300倍、25 L / 10a	収穫7日前まで	散布	2回以内	F:U14、F:16.1
	1,000倍、60～150 L / 10a				
アミスタートレボンSE	300倍、25 L / 10a	収穫14日前まで	散布	3回以内	I:3A、F:11
	1,000倍、60～150 L / 10a				

※ QoI剤（アミスタートレボンSE等）は、耐性菌が出やすいため、使用は一作につき一回程度が望ましい。

※ 農薬はラベルの表示を確認して正しく使用してください。

※ 空中散布は希釈散布量が異なりますので必ずラベルの表示を確認してください。

(裏面あり)

紋枯病

紋枯病は、高温多湿条件で発生しやすくなり、7月下旬頃から葉鞘部に楕円形の斑紋(淡緑色～灰色)を形成します。8月上旬頃から隣接株へ感染していき、出穂期後に上位葉へ病斑が上がってきます。

【防除農薬の例】

令和6年6月6日時点の登録

農薬名	希釈、散布量	使用時期	使用方法	使用回数	RACコード
モンカッタ粒剤	3～4kg /10a	出穂30～10日前 但し収穫14日前まで	湛水散布	4回以内	F7
アミスタートレボンSE	300倍、25 L /10a	収穫14日前まで	散布	3回以内	I:3A、F:11
	1,000倍、60～150 L /10a				

※農薬はラベルの表示を確認して正しく使用してください。

縞葉枯病

(あさひの夢、とちぎの星、にじのきらめき、夢あおば、月の光は抵抗性品種です。)

縞葉枯病は、ヒメトビウンカによって媒介され、葉に黄白色の縞状の病斑を形成し、分けつ期に弓状に垂れ下がった姿を示します。高温の影響でヒメトビウンカが増加した場合、発生拡大が懸念されます。

※箱施用剤を使用したほ場で本田防除を行う場合は、同一RACコードの連用を避けてください。

【防除農薬の例】

令和6年6月6日時点の登録

農薬名	希釈、散布量	使用時期	使用方法	使用回数	RACコード
ダントツ粒剤	3kg /10a	収穫7日前まで	散布	3回以内	I:4A
トレボン乳剤	300～600倍、25L /10a	収穫14日前まで	散布	3回以内	I:3A
	1,000～2,000倍、60～150 L /10a				

※農薬はラベルの表示を確認して正しく使用してください。

稲こうじ病

現在の農産物検査規格では、稲こうじ病による被害粒の混入が確認された場合には規格外となり経済的な被害が大きくなってしまいます。近年の発生は少ない状況ですが、天候次第では、多く発生する可能性がありますので注意してください。

(1)伝染経路

病癍に形成された厚壁胞子が稲刈りなどによって地面に落下して、土壤中で越冬します。昨年発生が見られた圃場では今年も発生が懸念されるので、防除が必要です。発病が確認されてからでは防除は間に合わないため、予防的な対策が中心となります。

(2)防除

【防除農薬の例】

令和6年6月6日時点の登録

農薬名	希釈、散布量	使用時期	使用方法	使用回数	RACコード
モンガリット粒剤	3～4kg /10a	収穫30日前まで	湛水散布	2回以内	F:3
ドイツボルドーA	2,000倍、60～150 L /10a	出穂10日前まで	散布	—	F:M1

※農薬はラベルの表示を確認して正しく使用してください。

注意！ この時期以外の散布では防除効果が落ちます！！

- ・銅剤（ドイツボルドーA）を出穂20～10日前に散布。
- ・シメコナゾール粒剤（モンガリット粒剤）を出穂21～14日前に散布。

○耕種的防除

- ・多肥栽培は発生を助長するので適正施肥を行いましょう。特に肥料が遅効きしないようにしましょう。